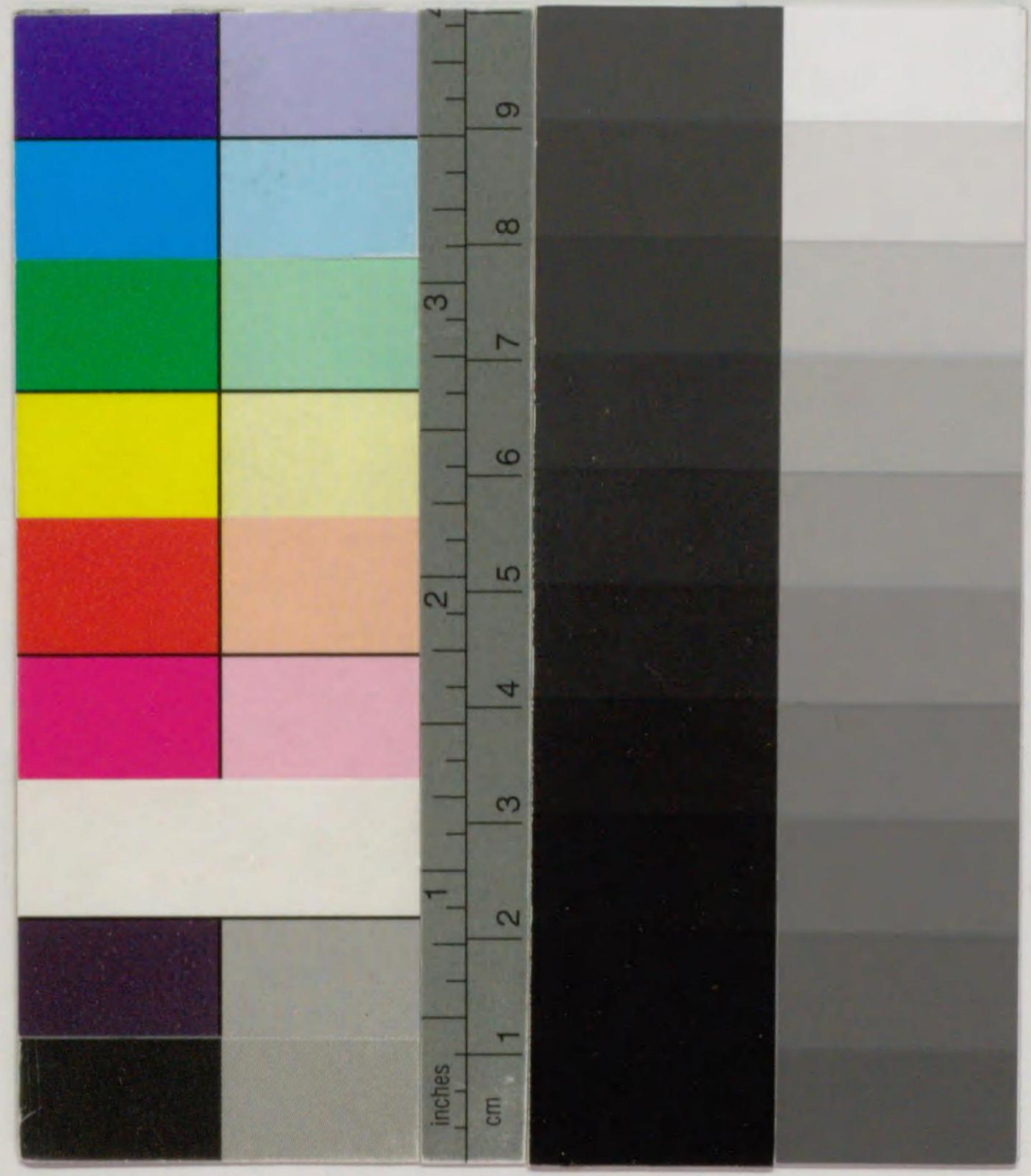


長次川鶏飼の記

186
327

186-327
1200800017997



長良川鵜飼の記



186-327

長良川鵜飼の記

日本鵜飼の起原及長良川鵜飼の來歴



我日本帝國に於ける鵜飼の起原は未だ詳かならずと雖も、或は遠く神代の昔にあるも知るべからず、而して之を書史に徴するに日本書紀、神武天皇御製に、島つ鳥鵜養か徒と詠せさせたまひしを始として、令義解にも鵜飼、江人、網引と見へ、和名鈔に美濃國方縣郡鵜養と記し、集釋別記に鵜飼三十七戸とあり、又新撰美濃志には方縣郡鵜飼の郷、折立、黒野、下鵜養、小野、古市場、今川、交人、洞、御望の九箇村今の稲葉郡黒野村大字折立、黒野、洞、御望、本巢郡西郷村大字小野にて、折立は其の中の本郷とあり、里老の傳ふる所に依れば、延喜年間、長良川の邊に鵜飼七戸あり、美濃國守藤原利仁

勅を奉じ、鵜飼の鮎を干製して進献せしに、叡慮に適ひ、爾後毎年干鮎を献せり之に依て、朝廷より鵜飼七戸に當國方縣郡の内にて七郷の地を篝松の料に賜はる、之を鵜飼七郷と稱し、其の地に七社明神ありて、當時の氏神なりしと云へり、其の後時勢と共に變遷し、一郷一戸の鵜飼は分れて三戸或は四戸となり、仁平年間には、七郷にて二十一戸となり、盛に此業を營み、鮎の風味も殊勝なるを以て普く世間に知られ、遂に國産の一となれり、其の頃鵜飼の長たりし白明と云ふ者、鵜漁の益々盛ならむことを計り、河流の便利に隨ひ、鵜飼業者を方縣郡長良村今の稻葉郡長良村大字長良各務郡岩田村今の稻葉郡岩田村大字岩田に分住せしめしに、後世岩田村より武儀郡小瀬村今の武儀郡瀬尻村大字小瀬に移れりと云ふ、又平治元年、源義朝待賢門の戦に敗れ、東走のとき、其子頼朝父に後れて長良川の下流に到る、時に夜暗ふして路に迷ひ、遙に燈火を認て鵜飼の家に投ず、主

翁厚く之を遇し、發するに臨み鮎鮎を製して旅餉に供す、後建久元年、頼朝上洛の途次、翁の子孫を尾張熱田大宮司季範の館に召見し、土瓶二個に一は金錢を盛り、一は銀錢を盛りて之を與へ、先人の徳に報ず、此時又鵜飼ごもより鮎鮎を献す、是れより例として鎌倉幕府に鮎鮎を献することとなり、降て足利氏の時にも、生鮎を室町幕府に献せしことありと云ふ。

文明年間、一條禪閣兼良京師の亂を避けて美濃に來りしとき、長良川の鵜飼を觀し、こと藤川記兼良自撰の日記に見ゆ、「十七日又かゝしまへかへる、月出ぬほと江口に出て鵜飼を見る、六艘の船に篝をさしてのほる、又一艘を設けて其れに乗りて見物す、おほよそ此川の上りくたり、闇になれば獵船の數を知らぬと聞て、ゆふ闇に八十とものをの篝さしのほるうふねの數はしられず、鵜の魚をとるすかた、鵜飼の手繩

をあつかふ體など、けふはしめて見るなれば、言の葉にもものへかたく、哀とも覺へ、又興を催す物なり。うかひ人くるやたなはの短夜もむすほゝれなはとくはあけしをすなはち鶉のはきたる鮎を篝火にやきて賞翫す、これを篝火やきといひならはしたりとなむ、とりあへぬ夜川の鮎の篝火やきめつらとも見むあはれともみむ」とあるは能く當時の實況を寫したるものと謂ふべし。

永祿七年、織田信長長良川の鶉飼を觀覽し、是れより鶉飼業者を鶉匠と改め、鷹匠と等しく遇し、一戸に祿米十俵と漁船を給す、慶長五年關ヶ原の役、福島正則の先鋒大橋茂左衛門金華山の背後より進撃せしとき、軍役を鶉匠及び此の土地の者に命せしに、之に従はざりしに依り、火を縦て家屋を焼かれ、此時鶉匠の家に傳はりし古記録悉く鳥有に歸せりと云ふ。

元和元年、徳川家康大阪より凱旋の途次、岐阜に宿陣して鶉飼を觀る、其の場所は金華山の下、鏡岩の瀬にて、家康の乗船を中央に泛べ、二十一艘の鶉船其の前後左右を圍繞して鶉を使ひ、捕りたる鮎を石焼石川を拾ひ之を篝火にて焼き、其の石にて生魚を焼くとなして供せり、續て徳川秀忠も亦た來りて鶉飼を觀覽せり、是れより先き、慶長八年、始めて家康に鮎鮎を献せしに大いに之れを賞美し、爾來鶉匠二十一名に給米料として各金拾兩宛を支給し、鶉匠の所有する土地の諸役を免じ、且つ鶉飼保護の爲め、美濃國郡上郡より安八郡までの内、郡上川長良川の上流を始め、支川十二流の沿川各村に令を下し、川筋にて新築、或は新ソヂを打ち、鮎を堰止め、又は鶉飼先にて網を入るゝ等すべて鶉飼の妨害となることを禁止せり、同時に岐阜に鮎鮎製造所を置き、毎年五月より八月まで、月に二回鮎鮎を江戸に送らしめ、同十九年よりは増して毎月六回となし、其の費用は

岐阜陣屋より支辨せり、元和五年以後は名古屋藩の所轄となりしも、
舊例の如く毎年江戸に送献し、猶ほ禁裏御所女院御所進献の御
用を命せられ、寶永四年、鵜匠頭三名に苗字を許し、文化五年、十二名の
鵜匠二十一名なりしも、廢業者ありて當時十二名となれりに祿米百二十石、金五百參拾貳兩貳分を給せ
らる。

慶應三年、有栖川宮殿下より禁裏御所へ麴漬の鮎進献の御用を
蒙り之を製造して奉呈せり。

明治維新の改革にて、從來の待遇を廢し、米金の給與を止め、更に鵜匠
に川漁取締役を命じ、一名に二人口宛の廩米を給せられしに、明治四
年に至り又之を廢され、同六年以後は岐阜縣へ若干の鵜飼税を納め、
自力にて營業することゝなれり、然るに同十一年十月、
明治天皇御巡幸岐阜、御駐輦のとき、岩倉右大臣長良川に船を浮べ、

鵜飼を觀覽して大に其の奇觀なるを賞讚し、其の夜捕獲せし鮎を直
に天覽に供へられしに、金若干を鵜匠に賜はる、又同十三年六月、京
都府外二縣へ御巡幸の御途次、岐阜縣土岐郡多治見村に御駐
泊のとき、富小路侍從より鵜飼の鮎を名古屋行在所に奉るべき
旨を傳へられ、鵜匠は直に旨を奉じ其夜捕獲せし鮎千尾を、行在
所に奉呈せしに、尙ほ京都へ回送し、御駐輦中の供御に奉るべし
とのことにて、縣官之を監護して京都に送致せり、同二十三年十二月、
長良川筋稻葉郡長良村古津に於て延長凡四百十間、武儀郡洲原村立
花に於て延長凡六百三十一間、郡上郡嵩田村上田に於て延長凡千六
百二十四間の三箇所を御獵場に定められ、獵場監守長、獵場監守、鵜匠
小頭、鵜匠を置き、宮内省主獵寮に隸屬せしめ、毎年夏期に、主獵官出張
して御用の鵜漁を行はれ、或は時に供御の鮎を召寄せらるゝこ

とあり、鵜匠には鵜飼用箒松の料として、岐阜市金華山、武儀郡美濃町、古城山の御料地枯損松木を賜はり、尙ほ御用鵜漁のときは若干の手當金を賜はり、同二十八年よりは前の手當金の外、鵜匠小頭、鵜匠には各々年給を賜はることゝなれり。斯の如く鵜飼は幾多の變遷を経て、時に盛衰ありしと雖も、連綿繼續して今日に至り、今や聖世の恩澤に浴し、此業の益々盛なると共に、岐阜名物の一として普く天下に聞え、明治維新後に於ては數々皇族殿下の臺覽を忝うし、明治二十六年八月、埴國皇太子、同三十九年五月、暹國皇族、同四十一年八月、今の李王世子、大正七年七月、英國皇弟、同九年七月、羅國皇太子各殿下の御觀覽あり、其他内外貴顯の來觀年を逐て増加し、遠近衆庶の觀覽避暑を兼ね、毎年來り遊ぶもの幾千萬なるを知らずと云ふ。

鵜の捕獲及馴致方法

鵜飼に使用する鵜は、愛知縣知多郡篠島の海岸に於て捕獲するものにて、島鵜と稱し、通常の鵜よりは其の形ち大にして頸の長さ七八寸、背一尺二三寸、全體の重量約六百五十匁、乃至八百匁あり、其の産地は詳かならずと雖も、冬期北海に鰯の群集して南海に移るとき、鵜も其れを追て、北海より南海に來ると云ふ、之を捕獲する方法は、海面に露出せる岩上に藜玉を置き、鵜の自ら來りて藜玉に罹るを捕へ、先づ一羽を獲れば麻絲にて眼瞼を縫ひ、之を囿として岩上に留置き、其附近に數多の藜玉を配置して他の鵜を誘ふ、他の鵜は友鳥の岩上にあるを見て、其側に危険の伏在するを知らず、續々來りて之に罹ると云ふ。斯の如くして捕獲したる鵜は、何れも皆眼瞼を縫ひ、籠に入れて使用

地に送る、使用地に到れば先づ眼瞼を縫ひたる絲を抜き取り、翼の一部を剪りて飛翔すること能はざらしめ、猶ほ羽毛に附着せる鵜を悉く除去したる後、苧繩にて其の體を縛し、毎日一回船に乗て河水に放ち、繩付のまゝ游泳すること、又舷頭に停止することを馴習せしむ、初め未だ人に馴れざる間は、水に入りても魚を捕らざるのみならず、動もすれば人に咬ひ付く癖あるを以て、細き藁繩にて嘴を縛す、是れを嘴掛と云ふ、五六日を経て稍々人に馴れたる頃、嘴掛を除き、其れより又六七日を経て、古參の鵜と共に小川の淺瀬に放ち、随意に游泳せしむ、此時古參の鵜は互に競て魚を捕れども、新參の鵜は中流に彷徨して己れの業を知らざるものゝ如し、斯くて又四五日を経れば、古參の鵜を見習ひ、漸く一二尾の小魚を捕る、是れより次第に習熟して翌年五月鵜飼を始むる頃には、略ぼ獨立の働きを爲すに至る、然れども或

は篝火に恐れ、或は舟棹に驚き、且つ捕魚の術にも尙ほ熟練を缺く所あるを以て、一二年を経るに非ざれば、充分の活動を爲すを得ず、鵜匠は克く鵜の勤惰、能否を知りて之を使ひ、鵜の年齢に依りて其の席次を定め、又各々の鵜に命名して之を呼ぶ、漁業畢りて鵜を舷頭に整列せしむるときは、宛も軍士の戦勝て隊伍を整ふる如き觀あり、首を擧げ翼を振ひ、意氣昂然として四邊を睥睨す、此時若し其の席次を誤れば、忽ち争鬪を生ずと云ふ。

鵜は漁業の季節五月十一日より十月十五日までを除く外、餌飼を以て養ふ、餌飼とは、縛繩を施さず、随意に游泳して自由に魚を捕食せしむるを云ふ、然れども食量一定ならざるときは、疾病を醸す虞あるを以て、鵜匠は鵜の雙翼を提て腹部の重量を試み、過食したるものは之を吐かしめ、不足のものには豫め蓄ふる所の生魚を與へて之を補はしむ、又鵜匠の家には必

ず鳥部屋を設け、且つ常に生魚を蓄へ置き、餌飼の充分ならざるとき、又は寒中降雪甚しきとき、或は雨後濁水るときは家飼を爲す、食量は一日一羽に凡二百匁を適度とし、正午頃一回之を給す、餌は鱈を最も宜しとすれども、鮎、鮠其の他の雜魚を交せ與ふ、鵜の壽命は、從來二十年乃至廿五年なりしも、近年は平均十二三年に減縮し、又傳染性の熱病發生し、これに罹るものは早きは即日、遅きは四五日にて斃れ、或は治癒するも、廢鳥となりて使用に堪へざるに至るものありと云ふ。

漁業の方法

鵜飼漁業は、鮎の稍々成長したる頃、毎年五月十一日より十月十五日まで、満月の夜と雨後濁水の時を除く外、毎夜之を行ひ、上弦には月に入るを待ち、下弦には月の出ざる前に、上流より漸次下流に狩り下す、

鵜船の數は長良は七艘、小瀬は五艘にして、長良と小瀬とは相互の協約を以て、漁獵の區域を定むと雖も、御用鵜飼のときは合同して之を行ひ、其の他のときに於ても、或は連合して之を行ふことあり。鵜船一艘の乗組員は、鵜匠一人、中鵜使一人、船夫二人にして、舳先きに篝火を焚きて水面を照し、鵜匠は烏帽を冠り、腰蓑を着け、舳先きに在りて十二羽の鵜を使ひ、中鵜使は中央に在りて四羽の鵜を使ふ、船夫は舟棹を執りて、艦と中央とに在り、一を艦乗と云ひ、一を中乗と云ふ。鵜匠の鵜を使ふには、左手に手繩を握り、鵜の魚を逐て出沒游泳するに隨ひ、交互紛糾せる手繩を捌きて、其の行動を自由ならしめ、魚を呑みたること多きものは之を船に引上げ、右手を以て鵜の喉を壓し、左手に手繩を握りたるまゝ、嘴を開きて魚を吐かしむ、吐き畢りたる鵜は復直に放ちて之を使役す、其の間に屢々篝火の薪を添へ、又船の方針

を指示するなど、頗る繁忙にして最も敏捷の手腕を要す、船夫は克く河流の緩急、淺深及び鮎の多く棲息する所を知りて船を行り又鵜の行動に隨て船を進退し、鵜匠と相待て共に操縦の妙を極む。

鵜の魚を捕る際には或は其の頭部を咬み、或は其の後尾を咬むことあるも、之を嚙下するには必ず頭部よりす、稍々大なる魚の後尾を咬みたるときは、一旦之を空間に振り上げ、其の落下し來るを受けて嚙下す、其の機敏にして熟練なること、一も過つことなし、然れども適々鰻を捕りたるときは頗る困難を極め、再三振り上げて其頭部を咬むも、容易に嚙下すること能はず、往々之を逸することあり。

鵜匠が鵜の喉を壓して魚を吐かしむるは、一見稍々残酷なるが如しと雖も、鵜は既に常習となりて毫も厭苦の狀なく、直に再び水中に投じて魚を搜索す、又鵜の喉を縛ること緩に失するときは、捕りたる魚

を腹部まで嚙下し、之が爲め早く滿腹して捕魚を怠り、又嚴に過る時は早く飢勞して遂に病を醸すことあり、其縛り方は小魚を嚙下し得るを度とし、緩嚴宜きを得ると最も必要にて一の秘訣なりと云ふ。

鵜船は一の瀬を下る毎に先後の順序を改め、上の瀬にて先頭なりしものは、次ぎの瀬にて後尾に廻はり、順次其の序列を變更するを例とす、其の船列の狀は魚鱗の如く、又鶴翼の如く、秩序整然として流れに隨て下る、又時として數多の鵜船を一行に並べ、水の淀みたる場所を包圍して卷狩することあり、之を搦みと稱す、此時各船の篝火は水を照して晝よりも猶ほ明かに、船夫は舷を扣き、鵜匠、中鵜使は疾呼して鵜を奨勵す、其の舷を扣く音、鵜を奨勵する聲相和して水面に響く、鵜は勢に乗じて縦横自在に出没し、逃るを追ひ匿るゝを捕へ、魚族をして幾んど遺類なからしめんとす、鮎の狼狽して度を失ひたるもの、或

ば砂上に跳ね上り、或は躍て舟中に入るこゝろあり、是れ鵜飼漁業中の最も壯觀にして觀覽者の激賞する所なり。

附記

岐阜市は東西兩京の中間にありて東海道線岐阜驛を南端とし廣袤一里に出入し人口六萬を有する岐阜縣第一の都會なり、百貨輻輳水陸運輸の便あり商工業の繁盛を以て世間に知らるゝのみならず、山紫水明内外人の來り遊ぶもの常に絶えず、就中長良川の鵜飼は養老の瀑布と俱に美濃奇觀の雙美として天下に喧傳せらる、夏時は大小數十艘の遊船を長良橋下に浮べて來遊者の需めに應ず、又古來王侯相將文人墨客の稻葉山及長良川鵜飼を吟詠したる詩歌俳句少からずと雖も茲に略す。

大正十年五月二十日印刷
大正十年五月廿五日發行

(非賣品)

岐阜市役所内

編輯者兼 發行者 岐阜保勝會

岐阜縣岐阜市七軒町十一番地
西濃印刷株式會社代表者

印刷者 河田貞次郎

印刷所 西濃印刷株式會社

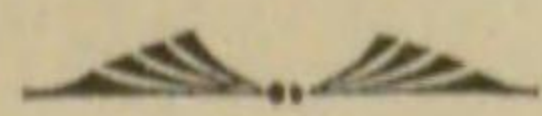
岐阜縣岐阜市七軒町十二番地

岐阜支店

the neck must be bound in such a way that a small fish can pass down the throat.

The order of the boats is changed at the end of each fishing.

Sometimes the boats surround a place where the stream is not so rapid, and, while fishing, the fishermen beat on the sides of the boats or make noise by shouting to one another, in order to encourage the cormorants. In the mean time the birds excited by the fishermen, pursue the fish so fiercely that some of the fish, panic-stricken, jump into the boat or on the sand.



THE WAY OF FISHING WITH CORMORANTS.

The cormorant-fishing can be carried on every evening from May 11th. until October 15th. except in moon-light night or in muddy water.

Each of the fishing-boats which are usually twelve in number, carries a crew consisting of a chief fisherman, an assistant, and two boatmen; provided with a cresset or large torch at each bow, the boats are rowed down the river one by one.

The chief fisherman who wears an "eboshi" (a kind of headgear or hat used in old Japan) and a "koshimino" (loose waist-covering made of dried grass) manages twelve cormorants at the bow while the assistant manages four in the middle.

A string is tied to each bird and the fisherman takes hold of the end in his left hand.

As soon as he sees the fish gathering round the torch, he let loose the string and the cormorants quickly swim after the fish and dive into the water to catch them.

It needs skill to manage so many strings at a time as they are apt to be entangled by the struggles of the birds.

When a cormorant has swallowed a certain number of the fish, the fisherman hauls in the bird and makes it disgorge them by pressing its neck and throat. Immediately the fisherman again let the bird go after the fish. When a fish is caught, whether by the head or tail, the cormorant would swallow its head first.

If the cormorant catches a large fish by the tail, the bird throws it up into the air and catches it with the bill in so dexterous a manner that it never fails; but an eel often escapes.

The disgorging of the fish by pressing the bird's throat seems to be cruel, but the bird feels no pain as it is already accustomed to that method.

Skill is necessary in binding the bird's neck with cord, because if it is too loose, the bird would directly pass the fish down to the stomach and consequently grow dull, whereas, if it is too tight, the bird soon gets tired and occasionally sick; so

ming and standing on the edge of a boat, but as they can not catch fish and are often apt to bite people until they are completely tamed, their beaks are bound with straw-rope.

In a few days the cormorants, being secured with cords, are set free on a shallow river with some older ones, the juniors only float about in the middle stream, as if they do not know what to do, while the seniors are busily engaged in catching fish in competition.

In May of next year, when the fishing season sets in, they become qualified to pursue their independent profession, but even then frightened at torch or boat-pole they can not perform their proper work perfectly until one or two years later.

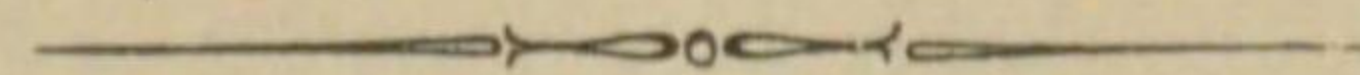
The cormorants have the order of their standing place settled, according to their age, by the master who perfectly observes their ability and capacity.

When fishing is finished, all the cormorants stand in order on the edge of the boat in the attitude of triumphant warriors and if there happens any mistake in their precedence, they suddenly start a

quarrel, and keep on until they are put in proper position.

In former times the life of a cormorant used to be from twenty to twenty five years, but lately it has been diminished to twelve or thirteen years on an average.

Except in the fishing season which begins on 11th. May and ends on 15th. October, the cormorants are set free on a river to feed themselves, but if the quantity of their food is irregular, they may be affected with a disease, and their master is in the habit of examining their weight, and when he finds that they have taken too much food he causes them to disgorge some quantity and in case he finds that the quantity of food they took is too small he gives them some fish that he has kept alive for that purpose.



ORIGIN OF FISHING WITH CORMORANTS.

The origin of fishing with cormorants in Japan is not known exactly, yet that of fishing of that sort on the River Nagara can be traced as far as over one thousand years ago by some books and traditions.



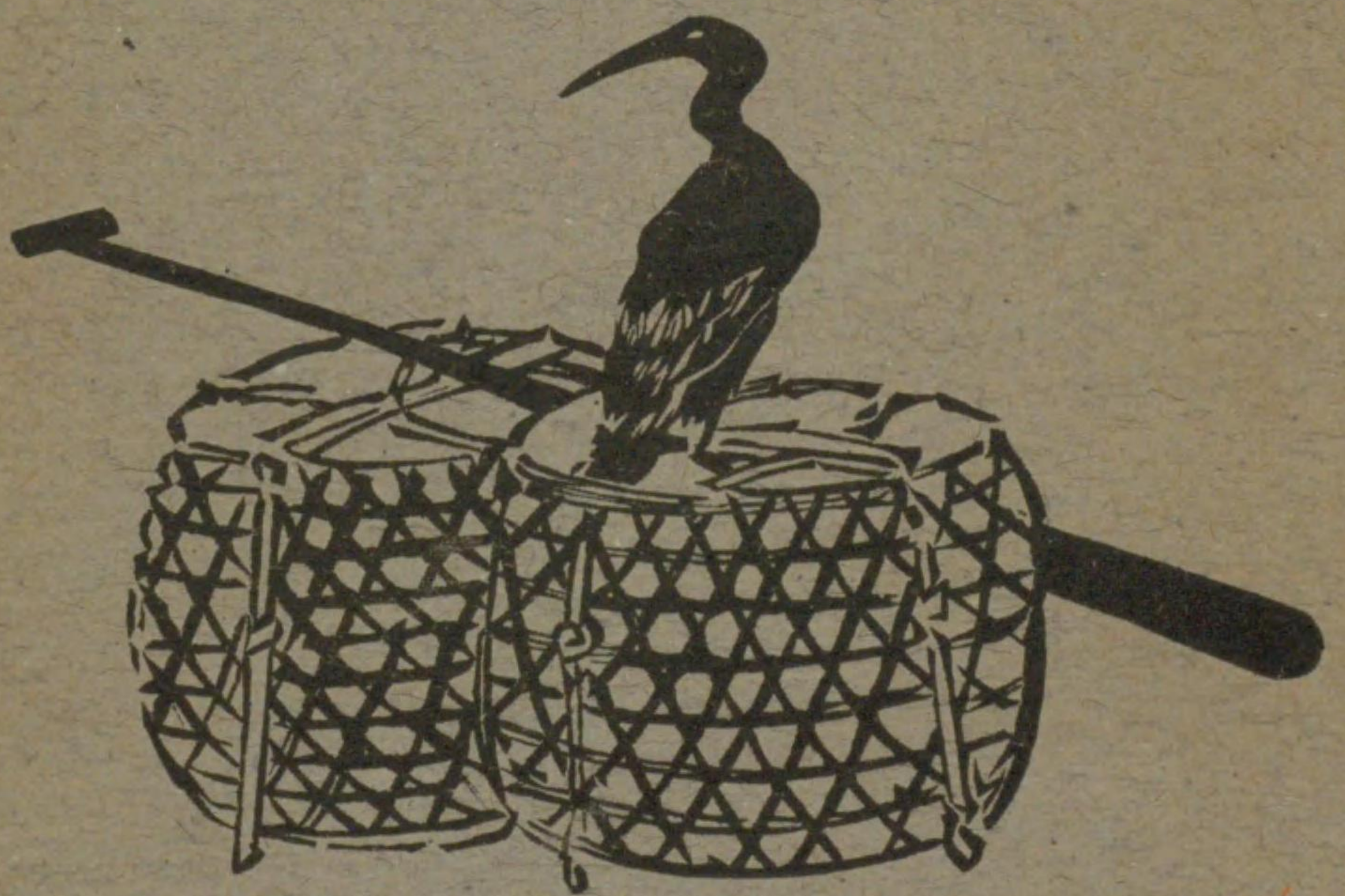
THE WAY OF CATCHING AND TRAINING THE CORMORANTS.

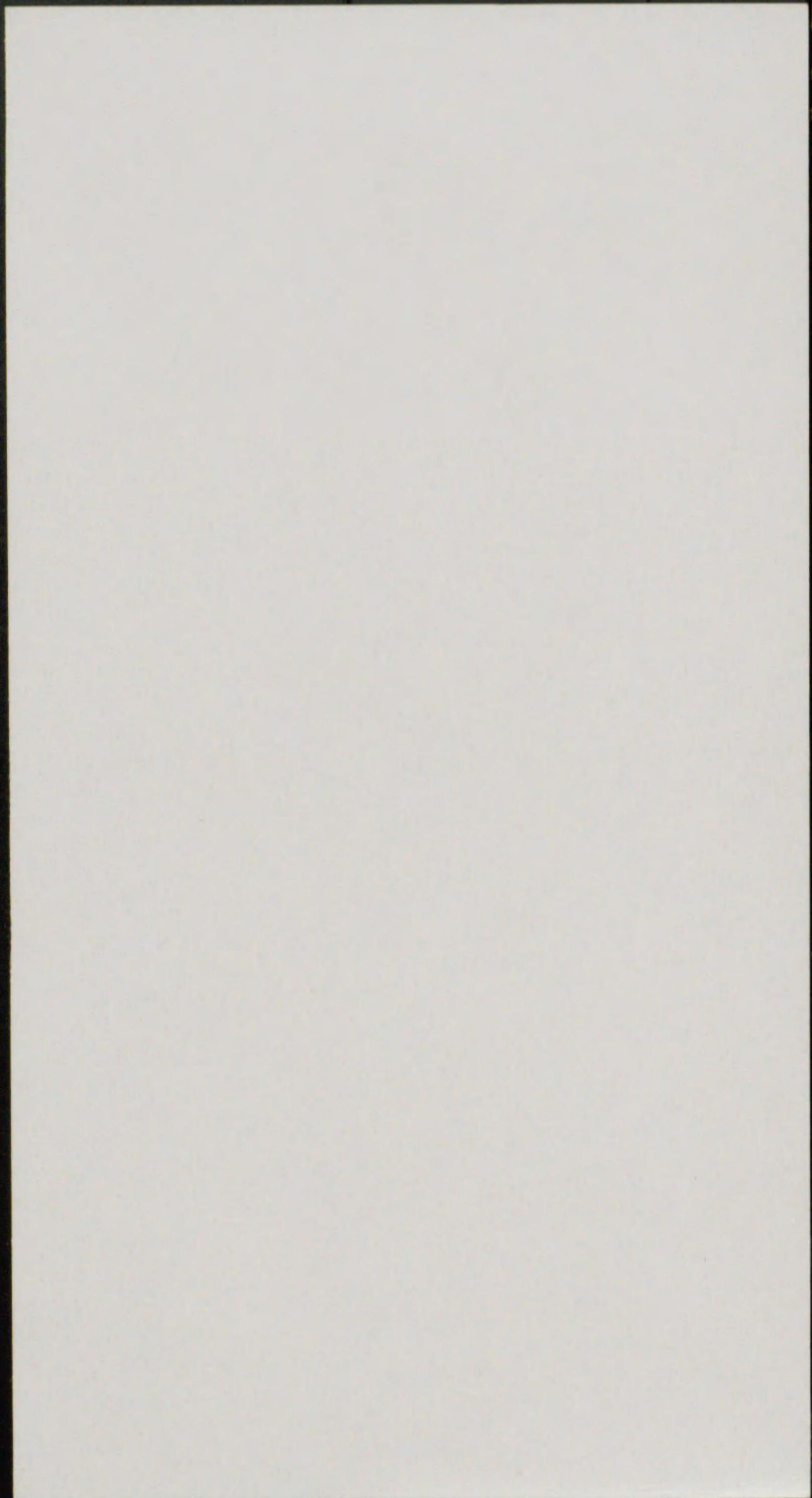
In order to catch the cormorants, bird-lime is put upon some rocks which stand in the sea, and when one of them is caught, it is kept, as a decoy, upon an available rock, and round the rock some bird-lime is put, as a means for catching other cormorants that come near their old friend, taking no notice of the dangerous contrivance which controls their fate.

The cormorants caught in this way are set free once every day on a river for training by swim-

186
327

THE GORMORANT-FISHING
ON THE RIVER NAGARA,
GIFU, JAPAN.





國 圖
書
韻 鏡